

# 浦島伝説

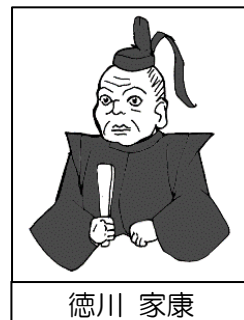
令和6年9月13日

第16号



## 戦国時代のあるエピソード

江戸幕府を開くことで有名な徳川家康（とくがわいえやす）の幼名は竹千代（たけちよ）です。現在の愛知県、三河地方の小さな豪族である松平家に生まれました。家康の父は、松平家存続のため、自分の子である家康を今川家の人質にさしだしていました。人質といっても、監視は付くものの武士の生活を送ることができました。



徳川 家康



今川 義元（いまがわ よしもと）

「海道一の弓取り」と呼ばれるほど優れた武将であった今川義元は、早くから家康の非凡さを見抜き、このまま成長すれば、いずれ面倒な相手になると感じました。義元は家臣に対し、『人質にとった幼い竹千代に、むごい教育をせよ。』と命じます。

そこで家臣は、竹千代を朝早くから起こし、すべて駆け足で行動させ、三食は粗食を与え、休憩も最小限、昼間は水練・剣術・槍術・馬術を厳しくやらせ、夜は学問をくたくたになる

までさせるというまるで修行僧のような生活をさせました。

しばらくしてから、今川義元は、家臣に『むごい教育をしているか』と尋ねます。家臣は自分が行ったことを得意げに報告しました。それを聞いた義元は『お前たちには、余の意図がわかんのか』と叱りました。

家臣が、『ではどのようにすればよいか』と義元に尋ねたところ、『朝は好きなだけ寝かし、海の幸や山の幸、ぜいたくでうまいものを好きなだけ食べさせよ。冬の寒い時には暖かくしてやれ。夏の暑い時には涼しくしてやれ。武術や学問が嫌だと言うなら無理にやらせなくてよい。本人の望む通りにほしがるものは何でも与えてやれ。何事も好き勝手させたらよい。身の回りの世話は全てして、どんなわがままでも聞いてやれ』と言い、こう付け加えました。『そうすれば大概の人間は駄目になる。』と。

義元は竹千代の将来を恐れ、困難に対してすぐに弱音を吐く骨抜きのだメ人間にしようとしたのでしょ。甘やかすことで、家康の成長の芽を摘み、松平家の再興などできぬ人間にしようとしたと考えられます。義元のいう『むごい教育』とは、「厳しくすること」ではなく、必要以上に「甘やかすこと」だったのです。「甘やかす教育=むごい教育」でした

今と戦国時代を同じように比較はできないし、みなさんは武士でもありません。しかし現代は物にあふれ、クリックすれば欲しい物が手に入る世の中です。不便なことから解放され、便利なのがどんどん増え、コンピュータや人工知能の進化によって自分で考えなくてもすむ時代です。義元流の『むごい教育』を行うための条件が見事にそろっています。『むごい』とは『残酷、無慈悲、悲惨』という意味です。食事を与えない、暴力で子供の心を支配するなどのいわゆる児童虐待は、文字通り『むごい教育』です。しかし、先回りしてハードルを取り除き乗り越える厳しさを経験させず、甘やかせてばかりも『むごい教育』といえるでしょう。

教育の目標は自立した社会人の育成です。食事の好き嫌いを言っていたら…、夜更かしをしてゲーム三昧の生活をしていたら…、スマホがほしいと言ってきたら…。必要以上に厳しくすることも考えものですが、時には厳しく、時には優しさをバランスよくしたいものです。決まりやあいさつの大切さを教え、感謝する心や我慢する心を養い、社会人として自立させることが大人の務めといえるでしょう。

